

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

「家族がいると」

旭丘小学校五年

正城^{まさき}

逢路^{あんじ}

わが家は五大家族だ。お父さんとお母さんそして、二人の弟がいる。だからぼくは長男だ。長男はそんだ。

「あんじは、お兄ちゃんだろ。」と親にしかられると、ぼくもがまんしているのと思う。

弟たちのせいでおこられたり、がまんさせられたりすることがあると、弟たちの顔も見たくないし、口も聞きたくない気持ちになる。

弟たちの味方ばかりするお父さんとお母さんにもうんざりだ。ぼくは、みんなに対して文句がある。まず次男のしどろは、ケンカをする、ツメで引っかいてくるし、ぼくがゲームをしたときに、借してくれないこともある。夜、早くねたいのになかなかねずに、うるさい。ねてからも歯ぎしりと鼻息がとてもうるさい。

次に三男のとうぎだ。とうぎは、とにかくワガママですごく生意気で言うことを聞かない。いつも自分勝手にケンカをすると、たたいてくる。ぼくがやり返すとすぐに泣いてお父さんやお母さんに言いつけにく。それでぼくがおこられる。

おもちやばは散らかしっぱなし、後かた付けもしない、いつもぼくがかた付けている。

お母さんやお父さんにもたくさん文句がある。

お母さんはいつもぼくに「〇〇を取って」と言うくせに、ぼくが「××を取って」とお願いしても、「自分で取れば」と言われることがある。

ぼくたちには「おかしはほどほどに」と言うのに、お母さんはおかしのおうわくに負けて、おかしをたくさん食べている。とくにふがしをたくさん食べているのがずるいと思った。

お父さんは、ぼくたちには「好ききらいするな、ちゃんと食べる」と言うくせに、お父さんもしいたけやワカメや納豆がきらいで食べていないのだ。

お父さんはぼくたちに「こんな動画、しょーもない」と言って、ユー

チューブを見せてくれないこともあるけど、お父さんが見ているテレビだって、子どもからしたら全然面白くない。

夜、ねている時のいびきがうるさい。雷みたいないびきだ。

家族みんなの文句を言ってみただけど、もし家族のみんながいなくなってしまうたら、ぼくはどう思うだろうと考えた。

もし、弟のしどろがいなくなったら、だれがぼくとゲームをしてくれるだろう。いっしょにおかしを分けて食べることができないし、ふざけて笑わせてくれることもないのはとてもさみしいと思った。

下の弟のとうぎがいなくなったら、きつと家の中がしずかになると思う。大声でふざけたり、笑ったり、泣いたりしないから悲しいくらいしずかな家になると思うし、ぼくはそれがいやだと思った。いつも、じやまな時もあるし、ワガママなやつだけけど、これからは大目に見てやろうと思った。

お母さんに文句を言ったけどお母さんがいたらいっしょに楽しくおかしを食べれるし、ふだんはゲームをしないお母さんだけどいっしょにゲームをやった時は、すごく楽しかったりする。

他にもぼくの好きな食べ物を作ってくれたりぼくのワガママも聞いてくれる。

お父さんにもたくさん文句を言ったけど、お父さんといっしょに食べるご飯がおいしいし、土曜日に習い事に連れていってくれる。

それからぼく達をえい画館に連れて行ってくれるのが楽しみだ。

ぼくは、家族みんなのことがありがたいと思った。

家族みんながいたら安心するし、あたたかいし、幸せだから家族にいてほしいと思った。

お父さんやお母さんに、ぼくはどんな存在かを聞くと、ぼくがいなくてどうなるかは考えられないけど正城家には、絶対にいてほしいと言っていた。

ぼくは、その言葉にありがとうと思った。